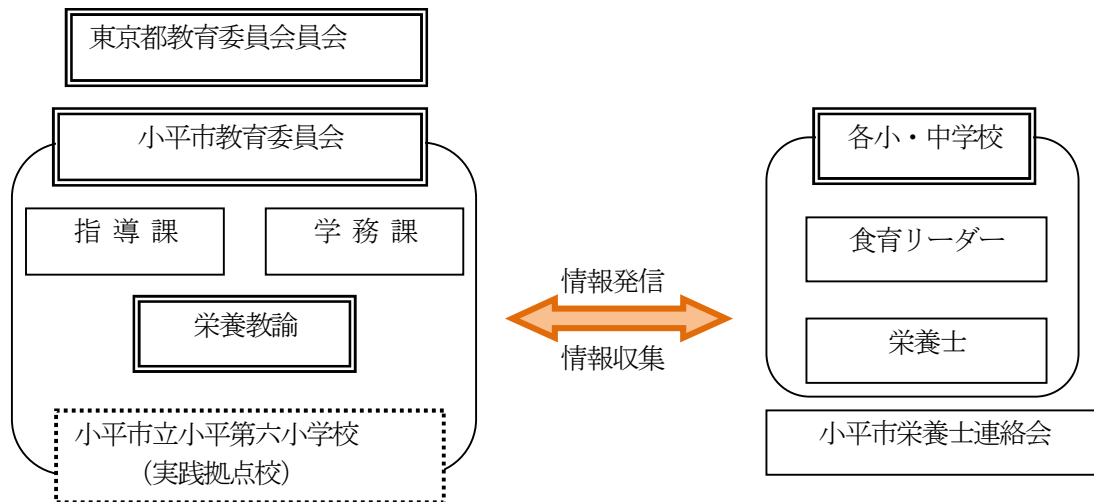


栄養教諭を中核とした食育推進事業 事業結果報告書

都道府県名	東京都
推進地域名	小平市

1. 事業推進の体制



2. 具体的取組等について

テーマ1

「食」のすばらしさに感動する子どもの育成

I 外部人材の活用

本物との出会い 豊かな教育実践

- 地域や企業等の外部人材の方々を招き以下のような体験活動を実践することができた。
外部人材の方々の専門的な知識や技術、経験に基づいた指導を受け、これらの豊かな体験活動により子どもたちの学びは深まり心に残るものとなった。

《 実践内容 》

- | | |
|------------------------------|---------------------|
| ・お月見の意味と団子作り | 地域の方々 |
| ・やさいソムリエになろう | 野菜ソムリエ |
| ・やさいはともだち（夏秋冬野菜作り） | 野菜ソムリエ |
| ・サマースクール
（江戸東京野菜を知り味わう料理） | 江戸東京野菜コンシェルジュ |
| （マイじゃこてん作り） | 愛媛県愛南町より材料あり |
| ・お正月行事と食べ物（餅つき、繭だま） | 地域の方々 |
| ・さつま芋、里芋栽培 | 地域の農家 |
| ・わかめのひみつを知ろう | 理研ビタミン（わかめ博士） |
| ・大根、枝豆栽培 | 地域の農家 |
| ・大豆のへんしん（醤油のひみつ） | キッコーマンしょうゆ塾（しょうゆ博士） |
| ・小麦栽培 | 地域小麦の会 |



- ・小麦から広がる世界（うどん作り）
- ・おやつを考えよう
- ・みかん収穫体験
- ・箸作り
- ・島でくらす人々
- ・お米の栽培指導
- ・日本の水産業（栽培漁業）
- ・日本の水産業（養殖漁業）
- ・骨のある魚を食べよう
- ・うま味を知ろう
- ・おなかの健康
- ・地産地消を見直し

好き嫌い無く食べよう

- ・移動教室に向けて農家体験
- ・移動教室に向けて酪農体験
- ・食品表示について
- ・お菓子作りのコツ

- 地域小麦の会・うどん保存会
- カルビー製菓（スナックスクール）
- 愛媛県西宇和郡みかん生産農家
- 江戸指物師のみなさん
- 東京都農林水産課八丈支庁
- 長野県東御市お米生産農家
- 愛媛県愛南町役場の方
- 岩手県漁連の方々
- お魚マイスターの方々
- 味の素 味覚教室
- ヤクルト東京販売



力の元カンパニー（一風堂）

- 地域の農家
- 明治（バター作り）清瀬市増田牧場
- ハーゲンダッツジャパン
- フランス菓子キャトル パティシエ



II 栽培体験的学習の充実

- 学童農園や校内の菜園で児童による栽培活動を実践した。児童自身が栽培した野菜を使って児童自らが「りりこ・で・ピザ」や「ポテトケーキ」などを料理して食べた。また、給食の時間に全校で食べることもできた。



*校内菜園を利用した体験活動

- ・「やさいはともだち」の学習
- 夏：加工用トマトの栽培
- 秋：小松菜の栽培
- 冬：二十日大根の栽培

*学童農園を利用した体験活動

- ・さつまいも・里芋の栽培
- ・大根・枝豆の栽培
- ・かぼちゃの栽培



栽培活動を通して、栽培した食べ物に愛着を感じ苦手意識をもっていた野菜でも「食べてみよう」とする態度が生まれた。また、それらの野菜を使って調理体験につなげることができた。栽培から調理の体験は自分の栽培した食材を他の人にも「食べてもらいたい」という気持ちを持てるようになってきた。

- 野菜の苦手意識への変容は、給食の野菜料理の残量の減少でも現れてきた。また子どもの指導後の感想にも「野菜は好きではないけれど自分の育てた〇〇は大好きになりました」と書かれていた。野菜の味や香り、色、みずみずしさなどを栽培を通して実感することが、野菜を好ましく思えるきっかけになったと考える。さらに野菜の栽培を通して命をいただくことの大切さも感じることもできた。

Ⅲ 食育指導計画の充実

- 食に関する指導の全体計画及び学年別年間指導計画を見直し作成した。(別紙参照)
- 食育は全教育活動をもって指導するものであることを基底とし、各教科・領域での学習内容に沿った外部人材活用型の学習を計画化し実践した。

Ⅳ 小平の食育の充実

- 外部人材を活用した体験授業の情報共有等を図るために、市内各校に本校の活動について毎月会議等利用して情報を発信した。
発信した情報から外部人材を活用した学習を市内3校が実践した。

《実践された体験活動》

- ・みかん収穫体験 愛媛県西宇和郡みかん生産農家
- ・お米の栽培指導 長野県東御市お米生産農家
- ・日本の水産業(栽培漁業) 愛媛県愛南町役場の方
- ・うま味を知ろう 味の素 味覚教室
- ・食品表示について ハーゲンダッツジャパン

- 市内各校の参加を募り、食育推進研修講演会を開催した。

① 様々な地域の食育とかかわって感じることに

健学社 月刊「食育フォーラム」

編集長 吉田 賢一 先生

本事業における評価指標と考察(数字で変化のあった事項について)

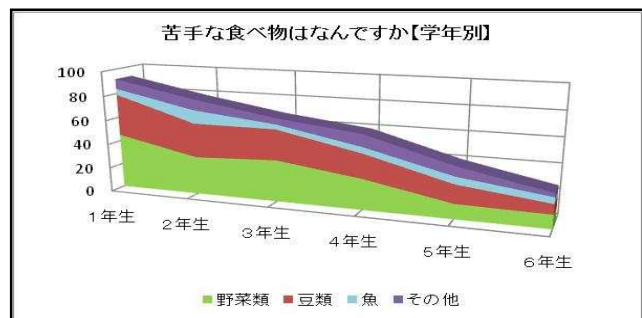
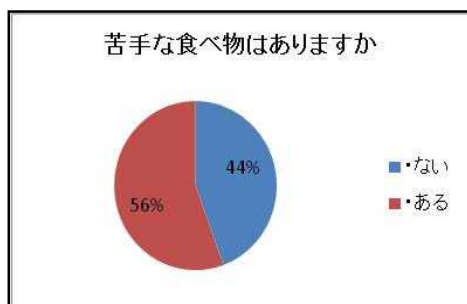
① 事業実施により得られた効果

*外部人材活用型学習の機会を広げることができた。

対象学年 第一学年から第六学年

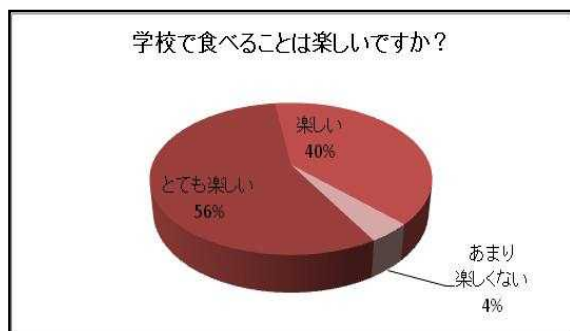
年間 35件

*外部人材を活用し、子ども達が「本物」に触れたり、「本物」を体験する機会を多く持つことで、食への関心を高め、食べ物を見直すきっかけを作ることができた。アンケートより苦手な食べ物が学年を増すごとに少なくなっている。



特に低学年では色々な種類の野菜が食べられるようになっていた。食べ物の名前と実物が一致して、名前を書けるようになったこれも体験活動の成果と考えられる。

*学校給食と調理実習などを含め、学校で食べることは楽しいかをアンケートした。



食べるのが楽しいと感じられる子どもが全体では96%と、とても高い数字となった。学校で食べる時と家庭で食べる時どちらが楽しいのか、その差があるのかを比べてみた。学年が変わっても学校で食べる方が楽しさを感じているようだ。皆で食べることの楽しさを感じているようだ。

食べるのが楽しいと答えた子どもは
前年5月には「とても楽しい」が36% 「楽しい」は58%だった。
3月の回答では「とても楽しい」が68% 「楽しい」は28%だった。
「とても楽しい」「楽しい」を合わせた全体では2%のアップとなったが
「とても楽しい」の割合が上がったことは評価出来ると考える。
食べるのがたのしくなることは、食へ関心が高くなっていると推察される。

本事業の成果

*各教科等に明示された食に関する指導の趣旨を活かし、食に関する全体指導計画の作成と各学年の年間指導計画を作成した。その計画に沿って各教科等において外部人材を活用した実践をすることができた。

今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

- *外部人材活用型学習を定着させていくために、今回の各実践を教科等との関連を明確にして学習計画に反映させておく必要性を感じた。
- *外部人材活用の情報共有等を図るための「人材活用ブック」等を作成することが有効と実感している。
今後作成に向けて準備していく。
- *小平第六小学校での実践内容を今後市内小学校にも広め、市内小学校のさらなる食育推進に努めていきたい。